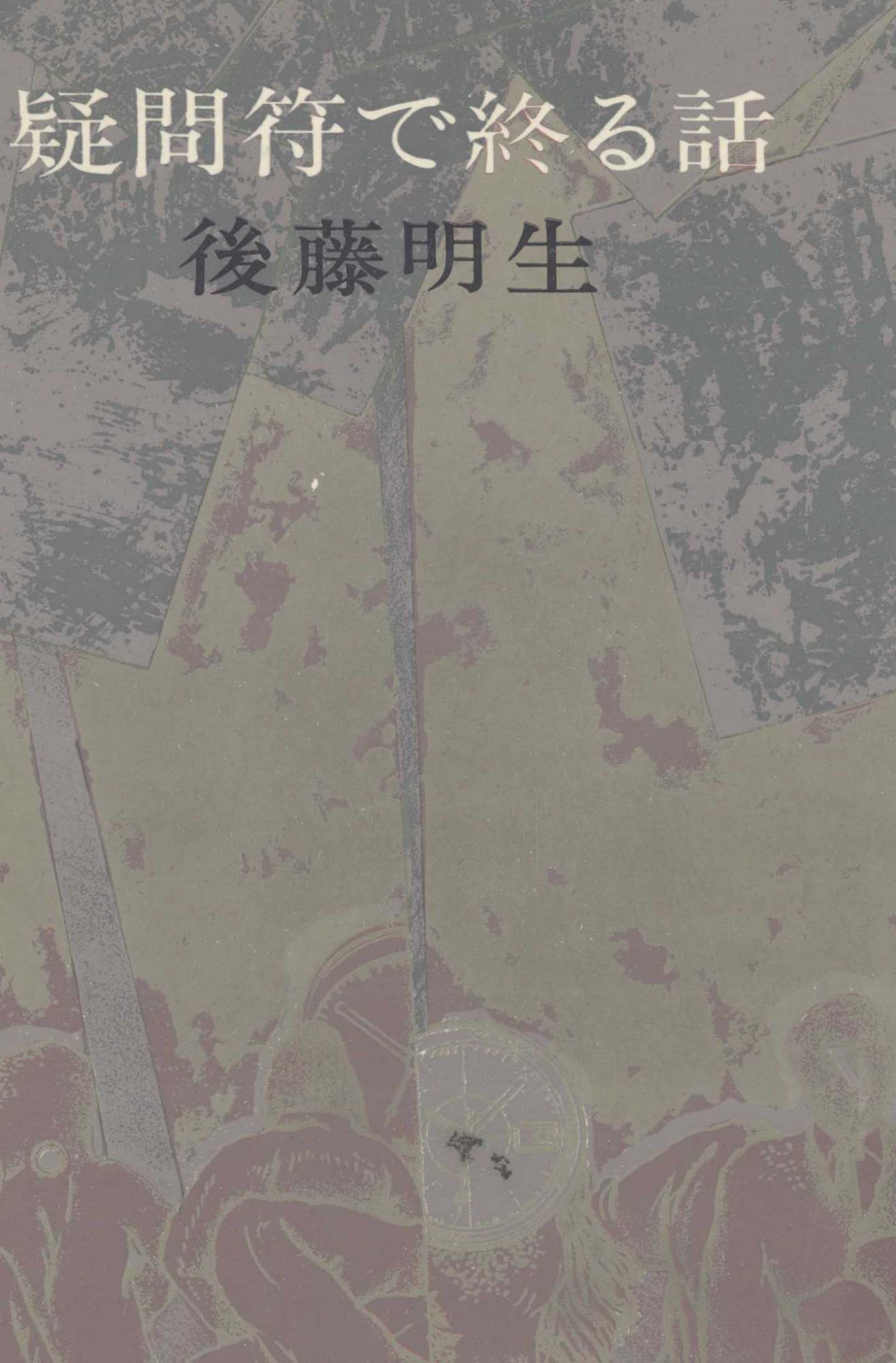


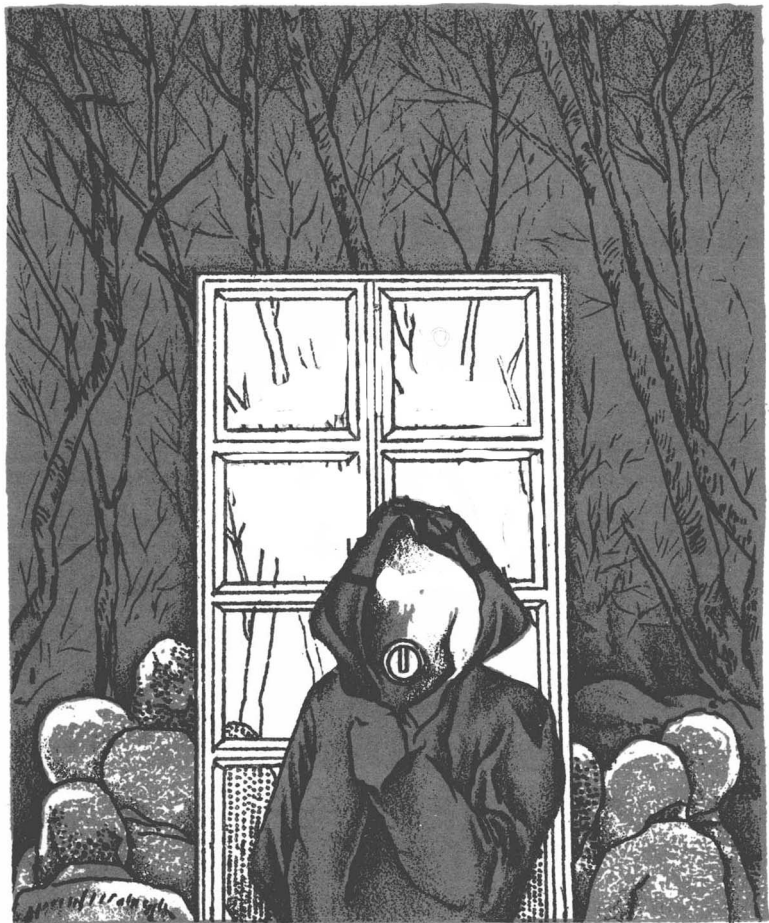
疑問符で終る話

後藤明生



で終る話

後藤明生



疑問符で終る話

昭和四十八年二月十日 印刷
昭和四十八年二月十五日 発行

七五〇円

著者 後藤明生

発行者 中島隆之

印刷者 矢部富三

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京(292) 三七二一番(代表)
振替東京 一〇八〇二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えます。)

印刷・三松堂印刷 製本・小泉製本

©1973 Meisei Goto Printed in Japan

0093-037301-0961

目次

疑問符で終る話

5

行方不明

41

帰宅した男

147

バイカル夏象冬記

199

後記

246

装帧
田村文雄

疑問符で終る話

疑問符で終る話

とにかく被害者にだけはならないことだ。なにがなんでも被害者にだけはなるべきではない。そのためにはあのテレビ屋を、絶対に玄関で喰い止めるべきだ。いかなることがあっても、それ以上わが家へ足を踏み入れさせてはならぬ。男ははまだ枕に頭を載せたままだった。しかしながらブザーを鳴らして玄関へ入ってきたものが、例のテレビ屋であることはすでにわかっていた。

「そうねえ、これで五度目ですものねえ」

という妻の声で了解したわけだ。五度目？ 男は電話棚のメモ用紙の脇に置かれていた、テレビ屋の名刺を思い出した。それがどことなく威圧的な名刺であったことも、同時に思い出された。右肩に社名がゴシック体で大きく印刷されており、名前も何々コータローといった具合の、セールスマンらしからぬ三字名だった。いったいどういう顔つきの男だろう？ 男は枕から頭を持ちあげ、ふとんの上に乗身を起こした。

「どうも奥さん、恐縮です」

という声が玄関からきこえた。男は思わずふんと鼻で笑った。調子のいいこといいやがって。こちらにはぜんぶつつ抜けなんだからな。実さい、男の寝ている北側の四畳半と玄関とは、襖ひとつで接しているのだった。間には、電気洗濯機の置かれている畳一枚ほどの板張りがあるだけだ。男は玄関の方へ足をむけてふとんを敷いていた。北側が窓であるから、東枕で寝ていたわけだ。ただし男は、すでにふとんの上に上半身を起こしていた。したがって、襖によって遮られてはいたが、玄関でこちらを向いて立っているにちがいないテレビ屋の男と、襖を隔てて向き合う形になっていたわけだ。

男がそのような姿勢で、玄関の応対をきくのははじめてではない。男の住居においては、いかなる外部からの訪問者も、その玄関以外から出入りすることはできないからだ。勝手口もなければ、裏木戸もない。鉄筋コンクリート五階建の二階に宙吊りになっている以上、それは当然の話だった。内部から外部へのそれは唯一つの出口であり、同時に外部から内部への唯一の入口だった。薄いブルーのエナメルで塗られた鉄製のドア。新聞、テレビ、牛乳、保険その他のセールスマンはもちろん、家庭訪問にあらわれる小学校三年生の長男の組担任も、すべてそこを通過してしか男の住居へ入ることはできない。畳半分ほどのコンクリートの玄関。そこはいわば男の住居における関所であり、港であり、最前線基地でもあったわけだ。

男は数ぶとんの下で伸ばしていた両足をあぐらに組み換えた。とつぜん目の前の襖を開いて、テレビ屋が顔を突き出しそうな気がしたからだ。とんでもない話だ。まだ顔を見たこともないテ

レビ屋は、玄関で妻にあいさつをしているところではないか。ダイニングキッチンからは、テレビ漫画の音がきこえた。男はあぐらをかいたまま手を伸ばして、窓際に置かれた坐机の上から煙草を取り寄せた。そのようなとき男の腕は、あたかもナマケモノのように伸びるのだった。ナマケモノ？　しかしながら男の四肢は決して、ナマケモノのように自由ではなかった。伸縮自在というわけにはゆかない。捻られたために肩か、あるいは首筋のどこかの骨が、小さな音をたてたからだ。明らかに運動不足だった。何という不健康なナマケモノだろう！　それとも肩をこらせたナマケモノだろうか？　しかし男は決して、一年じゅうただただ、ふとんの上にあぐらをかいていればよいという人間ではなかった。したがって、たとえどのような憧れを抱いたとしても、到底オブローモフにはなれない存在だった。そもそも団地に、オブローモフなどというものが存在し得るだろうか！　一人の下僕さえ持たぬオブローモフ。下僕はおろか、男はこの地上にただの一平方メートルの地面さえ所有してはいない。もちろん男だけではなかった。団地とは何ぞや？　団地とは、毎週月曜日から土曜日まで電車に乗って出稼ぎにゆく、土地なき通勤者の巣穴だからだ。しかしながら、そのような巣穴の住人の一人である男が、ナマケモノとして名高いロシアの地主に、しばしば憧れを抱いたのも、そのために他ならない。憧れの論理とは、そもそもそのようなものではあるまいか。

鉄筋コンクリート五階建ての団地の二階の、北向きの四畳半のふとんの上にあぐらをかいた男は、ふたたび肩の骨を鳴らして腕を伸ばした。後肢で枝にぶらさがったまま、前方の木の葉を取

って食べるべく前肢を伸ばすナメケモノのように！ 煙草の次は灰皿だった。それから最後にマッチを取り寄せて、ようやく火をつけた。しかしそのように苦心して一つ一つ取り寄せた煙草であつたにもかかわらず、男はすぐに吐気をもよおした。男はあたかも、現実に目の前の襖からテレビ屋の顔があらわれでもしたかのように、顔をしかめ、煙草をもみ消した。

まだ二日酔を続けているのだろうか？ 確かに男は二日酔だった。いったい何時だろうか？

子供たちの夕食はすでに済んだようすだ。しかしテレビ漫画を見ている以上、まだ八時を過ぎたわけではあるまいと考えられる。ポパイだろうか？ ムーミンだろうか？ 日曜日だった。それだけは男にもはっきりしていた。なにしろ男は、土曜日の夜から夜通し酒を飲み、日曜日の朝陽が昇るころ、泥酔状態で帰宅する悪癖をいまだに改めることができなかったからだ。いまだに？ そうだ。ヘビール二本あるいは水割り五杯！と書きつけた便箋を、男が北向きの四畳半の壁にセロテープで貼りつけたのは、その年の正月元日であつたにもかかわらずである。

毎週土曜日には必ず、というわけではなかった。しかし月のうち二、三度はそうだったようだ。アルコール中毒だろうか？ しかし男は、毎晩飲まずにはいられないという質ではなかった。いわゆる晩酌の習慣もない。したがって月に二、三度、日曜日の朝陽が昇るころ男が泥酔状態で帰宅することは、さほど致命的な悪癖であるとは考えられない。男は世の中に顔や名前を知られている存在ではなかった。しかしながらまず人並みに働いており、妻と二人の子供を養っている三

十八歳の無名の男だ。仕事は男の義務だった。その義務を放棄しない以上、酒を飲んで悪い理由はどこにもあるはずはなかった。男は悪徳漢でもなければ、破滅漢でもない。ごくふつうの酔っ払いに過ぎない。その酩酊状態に関する限り、いつそ模範的とかえ呼んでもよいのではあるまいか。乗り込んだタクシーの運転手に向って、行き先を告げるや否や眠り込んでしまい、東京都心から千円札一枚で十円玉二、三個の釣銭が来る距離にある団地へ到着してゆり起こされるまで眠り続ける男は、まちがっても酔っ払い運転などする気遣いはなかったからだ。もちろんマイカー族ではない。強いて名づければ、ハーフ・カー族とでも呼ぶべきだろうか？ 男にとって車とは、すなわち眠るべき座席であり、運転台のある前半部分に関して男はまったく無関心だったからだ。

もちろん泥酔は、美德とはいえない。健康的でないことも確かだ。しかしながら人間にとって健康とはいったい何だろうか？ 三度三度の食事と規則正しい脱糞だろうか？ その連続としての長寿だろうか？

「例えば、放屁だ」

と男はあるとき妻に語った。やはり朝陽が昇るころ帰宅した日曜日の、夜だった。不健康のためにわざわざ金を払い酔っ払いの気持ちかわからないという説はまことに合理的ではあるが、それでは女性が人前では何がなんでもおならを我慢するのは何故だろうか？ 某雑誌で読んだ産婦人科医の話によれば、女性の盲腸炎の原因は、ほとんどそのためだというではないか。その説は、

男に初耳だった。しかしおそらく事實はそうであろうと考えられる。なにしろ談話を發表しているのは、専門の産婦人科医だからだ。

「でもね、おれはその医者の説には反対だよ」

と男はいった。なぜならばその医者は、女性はすべて、健康を欲するならばすべからく自由に放屁すべし、と説いていたからである。時間も場所も氣にする必要はない！健康なくして何の女性美ですか、というわけだ。

「もちろん健康第一主義は、医師としては正論だ」

したがって、我慢と盲腸炎との関係を指摘、解説することはまちがいではない。あるいはそれは、医師として、特に産婦人科の医師としての、義務であるとさえいえるかも知れない。しかしながら、「だから自由に」という結論は果して医師として正当だろうか？越権行為とはいえないだろうか？もはやそこから、一人の人間の生き方の問題にかかわるものと考えられるからだ。義務か？越権か？この紙一重の分れ目が問題なのだ。

「披露宴の席上で、ついそそうをしたばかりに、自殺したという花嫁の逸話は知っているだろう？」

そのとき妻は笑い出さなかったようだ。何故だろうか？三面鏡の前で、ヘアピンを口にくわえていたためだろうか？男は湯上りだった。バスタオルを背中にひっかけて、ソファで煙草をふかしていた。

「その話は、有名だわね」

「つまり、そういうことなんだよ」

「でも、その場合は、お仲人さんに責任があるということになってるんじゃないかしら？」

「子供は？」

「え？」

「もう寝ちゃったんだろうな」

「その場合は、お仲人さんが、代りに一言恥をかけばよいことになってるんじゃないかしら？」

「それは、一つの教訓話としてだろうか？」

「あたしは、そういうふうにきいてましたけど」

「おれは何も、仲人心得帖をいつてるわけじゃないよ。問題はなぜ我慢をするかだ。盲腸炎の予防よりも、つまり健康よりも、大事なものが、ある場合にはある、ということです。要するに、パンのみに非ず！ 人間の価値は健康だけにあるわけじゃないということなんだ」

男はソファから立ちあがり、バスタオルを背中につっかけたまま、六畳の部屋を歩きまわった。喋りながら興奮したためだ。自分の吐いたことばに、思いがけない熱っぽさを男は感じた。おれたちはマジメな夫婦だ！ 二人の子供たちがすでに寝静まった時間に、何というマジメな問題を論じていることだろう！

「え、そうじゃありませんかね？」

男はコイル状のもので頭を凸凹にした妻のうしろから、三面鏡をのぞき込んだ。何とも快い脱氷状態だった。入浴の結果として、男はようやく、アルコールによる二日酔の呪縛から解き放たれようとしていたのである。それにしても何時間ぶりのことだろう？ 男は幸福な喉の渇きをおぼえた。

「アイスクリームは？」

「冷蔵庫ですよ」

と妻は三面鏡に向ったまま答えた。

「もうどろどろになってると思いますけど」

ダイニングキッチンの冷蔵庫の上に置かれた小型時計は、すでに十時をまわっていた。男はドアをあけ、製氷室からアイスクリームを取り出した。ボール紙の箱に手を触れたとき、妻のいう通り、アイスクリームは溶けかけているのが、男にもわかった。男はちょっと不愉快になった。

何だ、このアイスクリームは！ 蓋をとりはずすと、内側にくっついて溶けた分だけ、円形の表面が凹んでいた。男は掌に力を加えた。すると柔くなったボール紙容器の円形の表面は、あたかも被害者の表情のごとく歪んだ。被害者？ 確かにアイスクリームは被害者かも知れない。溶けたのはおそらく旧式な冷蔵庫のせいだからだ。溶けたのはわたしのせいじゃありませんよ！

フリーザーの付いていない、十年前の冷蔵庫のせいだ。十年前？ それは男が妻と結婚した年だった。そのとき冷蔵庫は、もちろん新品だった。そして最新型だった。男はダイニングキッチン